

自己変容想起とアイデンティティ形成の関係

堀 緩菜 信州大学大学院教育学研究科学校教育専攻臨床心理学専修
高橋知音 信州大学学術研究院教育学系教育科学グループ

概要

本研究では、実験的操作に基づいて現実自己変容想起群、理想自己変容想起群、現実自己変容想起を伴う理想自己変容想起群に群分けを行い、アイデンティティ形成との関連を自己変容想起内容と自己変容計画の具体性の観点から検討した。結果、理想の自分になった姿をイメージし、そのイメージをもとに現実自己変容について「今の自分を変える」ための計画を立てることがコミットメント獲得を促進し、アイデンティティ形成を促進すると考えられた。さらに、現実自己変容のための計画を立てる際は、詳細に具体的な計画を考えることよりも、理想の姿をイメージしながら、自分自身が傾倒できる計画を考える重要性が示された。

キーワード：アイデンティティ形成, 自己変容, 変容想起, 理想自己

問題と目的

アイデンティティ形成と未来展望を伴う自己意識

アイデンティティとは、「一貫性の感覚」と「意味・価値の感覚」の2つを持つことであると Erikson (2002/1994) が定義している。

アイデンティティの適応的な探究やコミットメントを促進する1つの要因として、未来展望を伴った自己意識が挙げられ(千島, 2016)、その一つとして可能自己がある。可能自己は、「将来そうになりたい」、「そうなりたくない」、「そうなるだろう」と思う自己のことであり (Markus & Nurius, 1986)、将来についての展望を伴った自己意識であると考えられる。その可能自己について、Kroger & Green(1996)では、40~60歳を対象に、過去を振り返らせる方法でインタビューを実施し、アイデンティティ状態の変化を検討する研究を行った。その結果、可能自己は、アイデンティティ地位の移行を促進し、達成地位への移行のきっかけになりうることを示した。また、Dunkel & Anthis (2001)は、アイデンティティ探究と可能自己は、正の関連があるという予想のもと、青年を対象に4か月の期間をあけて研究を行った。可能自己として、将来に「望む自己」、「望まない自己」を数の制限

なく自由記述させ、その数とアイデンティティ探究との関連を検討した。その結果、4か月後にも可能自己の数とアイデンティティ探究の間に関連が見られ、その関連の持続性と強さを示した。この結果から、未来展望を伴った自己意識がアイデンティティ形成を促進するひとつの要因として考えられる。未来展望を伴う自己意識がアイデンティティ形成を促進するのであれば、「こんな自分に変わりたい」というように自己の変容を想起することは、アイデンティティ形成過程において重要な機能を果たすことを示唆している。しかし、自己変容想起とアイデンティティ形成との関連を検討した研究は少ない。

アイデンティティ形成と自己変容想起

千島(2016)は、現実自己変容性(今の一な自分を変えたい)と理想自己変容性(これから一な自分に変わりたい)を考慮した自己変容想起とアイデンティティ形成に関する研究を行った。実験的に現実自己変容想起群、現実自己変容を伴う理想自己変容想起群、統制群の3群を設定し、アイデンティティ形成の比較を行った。Luyckx, Schwartz, Berzonsky, Soenens, Vansteenkiste, Smits, & Goossens (2008)で作成され、中間・杉村・畑野・溝上・都筑(2015)によって翻訳されたDimensions of Identity Development Scale(25項目, 5件法, 以下DIDS-Jと呼ぶ)の得点をアイデンティティ形成の指標とし、群間での得点比較を行った。その結果、現実自己変容を伴って理想自己変容を想起した群は、何も想起しなかった群と比べてネガティブなアイデンティティ形成が有意に減少した。

千島(2016)の研究は、自己変容想起とアイデンティティ形成の関係についての知見として意義あるものであるが、研究方法において疑問点が2点挙げられる。疑問の1つ目は、設定された群が「現実自己変容を伴う理想自己を想起群」と現実自己の変容のみ想起する群であった点である。この結果から、理想自己を記述することでアイデンティティ形成に影響を与えると述べているが、そう結論付けることに疑問が残る。そこで本研究では、理想自己変容のみを想起する群を加えた3群を設定し、アイデンティティ形成への影響の違いを検討する。

疑問の2つ目は、計画性について尋ねる項目が1問のみであった点であり、計画の重要性を断定することについても疑問が残る。また、自己形成的である者は、具体的方略を持つと言われている(山田, 2004)ため、計画の具体性がアイデンティティ形成と関連することが予想される。そこで本研究では、計画内容を記述させ、その計画を具体性の有無で分類し、アイデンティティ形成との関連を検討する。

本研究の目的

本研究の目的は、自己変容の想起がアイデンティティ形成にもたらす影響について、理想自己変容を想起すること、現実自己変容を想起すること、現実自己を伴って理想自己変容想起することの効果の違い、そしてその際の自己変容計画の内容について検討を行うこととする。加えて、変容後イメージ、志向性、計画性、変容計画の具体性に焦点をあて、アイデンティティ形成への影響を検討する。

方法

参加者

中部地方の国立大学生 119 名（男性 50 名、女 69 名）が参加した。平均年齢は 19.8 歳（標準偏差 0.68）であった。

材料と手続き

本研究は約 1 か月の期間をあけたプレ・ポストデザインによってアイデンティティ形成の変化量を検討した。研究の流れを図 1 に示す。

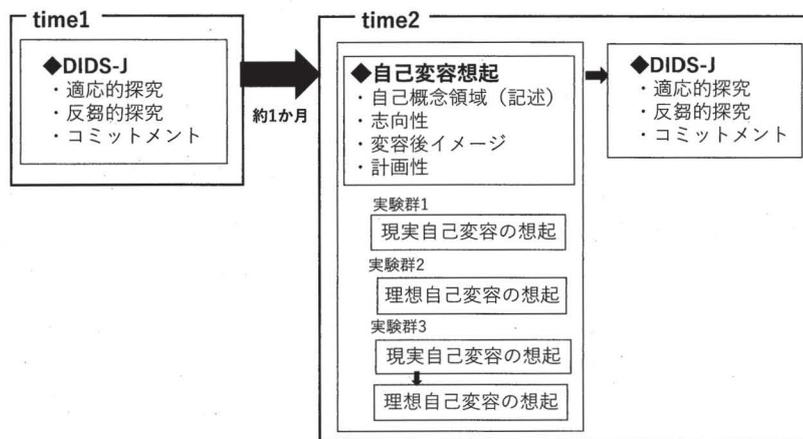


図 1 研究の流れと調査内容

time1 の質問紙では、全員に DIDS-J を用いてアイデンティティ形成について尋ねた。本研究では、千島(2016)に倣って、適応的探究(項目例：自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるか、すすんで考える)と、反骨的探究(項目例：人生で本当にやり遂げたいことは何か、はっきりしない)、コミットメント(項目例：私の将来の計画は、自分の本当の興味や大切だと思うものに合っている)の 3 つの変数を使用した。

time2 の質問紙は 3 群それぞれに異なり、3 種類の想起内容に分かれていた。群分けは、現実自己変容想起群(以下、実験群 1)、理想自己変容想起群(以下、実験群 2)、現実自己変容想起を伴う理想自己変容想起群(以下、実験群 3)の 3 群を設定した。実験群 1 には、現実自己、実験群 2 には、理想自己、実験群 3 には、現実自己に加えて、理想自己の想起を行う質問紙を配布した。対象者は 3 群に無作為に割り当てられ、time1 と time2 のデータを照合できた参加者は、実験群 1 は 46 名、実験群 2 は 44 名、実験群 3 は 29 名であった。time2 では、まず自己変容の想起について尋ね、その後アイデンティティ形成について尋ねた。自己変容想起は、千島(2014)の自己変容に対する志向性などを参考に作成された千島(2016)の項目を使用した。項目の内容は、自分の中の変えたい領域を意味する「自己概

念領域」、「志向性」、「変容後のイメージ」、「計画性」とした。計画性を回答した後、計画がある人はその内容を、計画がない人にはその場で考えさせて計画の内容を「一な自分を変えるために、、、」という文章に続く形で自由記述させた。

time1 の調査は 2017 年 9 月—10 月、time2 の調査は 2017 年 11 月に行われた。

結果

分析に際して、プレ・ポストデザインの場合、個人内変動の群間比較によって効果を検討することが推奨されているため、千島(2016)に倣い、time2 から time1 の DIDS-J の各得点を引いて変化量を算出した。変化量の平均、標準偏差を表 1 に示す。

表 1 自己概念領域記述者(119名)の DIDS-J 変化量の記述統計

	変化量					
	適応的探究		コミットメント		反芻的探究	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
全体	-0.52	4.20	1.03	4.89	-0.63	3.61
実験群1	3.98	1.11	4.46	0.78	3.57	1.17
実験群2	-1.36	4.15	0.52	4.56	-1.09	2.68
実験群3	0.28	2.91	0.83	4.84	0.17	4.10

分析 I アイデンティティ形成と群間比較

アイデンティティ形成の変化量の群間比較を行うため、従属変数を DIDS-J の 3 下位尺度の変化量とする 1 要因分散分析を行ったところ、今回は 3 群いずれの間でも差が見られなかった(適応的探究: $F(2, 116) = 1.54, MSE = 17.46, p = .218, \eta^2 = .026$ 、反芻的探究: $F(2, 116) = 1.09, MSE = 13.00, p = .341, \eta^2 = .010$ 、コミットメント: $F(2, 116) = 0.61, MSE = 24.05, p = .055, \eta^2 = .018$)。

分析 II-1 志向性と変容後のイメージ、計画性の効果

自己変容の志向性、変容後のイメージ、変容の計画がアイデンティティ形成に及ぼす影響が、自己変容想起内容によって異なるかを検討するために、独立変数を志向性、イメージ、計画性とし、従属変数を DIDS-J の変化量とした重回帰分析を群別に行った結果、実験群 2 では、反芻的探究において有意傾向が見られ ($R^2 = .16, F(3, 40) = 2.62, p = .064$)、計画から反芻的探究へ正の影響が有意傾向であった ($\beta = .30, p = .069$)。結果を表 2 に示す。

表2 実験群2の重回帰分析結果

		非標準化 係数(B)	β	p	Bの95%信頼区間	
					上限	下限
適応的探究	志向性	.06	.06	.708	-0.24	0.35
	変容後イメージ	-.72	-.17	.335	-2.23	0.78
	計画性	.27	.05	.765	0.77	2.10
			$R^2 = .02$.808		
コミットメント	志向性	.07	.07	.669	-0.26	0.40
	変容後イメージ	-.55	-.12	.506	-2.20	1.10
	計画性	-.51	-.09	.610	-2.51	1.49
			$R^2 = .03$.389		
反芻的探究	志向性	.05	.08	.608	-0.13	0.22
	変容後イメージ	.37	.14	.411	-0.53	1.27
	計画性	1.01	.30	.069	-0.08	2.10
			$R^2 = .16$.064		

分析Ⅱ-2 志向性と変容後のイメージ、計画性の効果 (time1 を統制した際の効果)

自己変容の想起が time2 の DIDS-J に効果を及ぼすか検討するため、従属変数を time2 の DIDS-J とし、群ごとに階層的重回帰分析を行った結果、実験群3で有意な関連が見られた。実験群3は、現実自己と理想自己の両方の変容想起に関する変数をそれぞれ別に投入した。よって、Step1の独立変数には、従属変数に対応する time1 の変数を投入し、Step2で現実自己の変容(以下、Rとする)についての志向性、変容後のイメージ、計画性、Step3で理想自己変容(以下、Iとする)についての志向性、変容後のイメージ、計画性を投入した結果、コミットメントが有意であった(Step1: $R^2 = .60$, $p < .001$; Step2: $R^2 = .64$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .04$, $p = .473$; Step3: $R^2 = .77$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .13$, $p = .024$)。現実自己変容に関しての計画、理想自己変容に関してのイメージがコミットメントと正の関連を示し(R 計画: $\beta = 0.39$, $p = .047$ 、I イメージ: $\beta = 0.94$, $p = .029$)、現実自己変容に関しての志向性が負の関連を示した(R 志向性: $\beta = -0.41$, $p = .030$)。結果を表3に示す。

表3 現実・理想自己変容想起とコミットメント尺度得点の関連

	β		
	Step1	Step2	Step3
t1コミットメント	.77***	.64***	.63***
R志向性		-.04	-.41*
Rイメージ		.14	-.30
R計画性		.15	.39 ⁺
I志向性			.29
Iイメージ			.47*
I計画性			-.04
R^2	.60***	.64***	.77***
ΔR^2		.04	.13*

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

分析Ⅲ-1 計画の具体性の有無とアイデンティティ形成の関連

記述した自己変容計画の具体性が、アイデンティティ形成に及ぼす影響を検討するため、自由記述させた自己変容計画の内容を、具体性の有無で分類し、アイデンティティ形成との関係を検討した。理想自己実現のための具体的方略に注目し、自尊感情との関係を検討した山田(2004)は、自己形成的である者は、具体的方略を有しており、自己に対する方略を取りやすことを示した。ここから、計画の具体性があれば、具体的方略を持つこととなり、計画が与えるアイデンティティ形成の影響に差があると考えられる。そのため、記述させた計画の内容から、計画を「具体性あり計画」と「具体性なし計画」に分類した。対象者は、実験群1、実験群2において想起した自己の変容計画を記述した者と、実験群3において、現実自己、理想自己のどちらの変容計画も記述した者を合わせた102名とした。

分類は、4つの基準を用いて行った。4つの基準のいずれか一つでも当てはまらない場合は具体性なし、すべて当てはまれば具体性ありとした。基準は、①計画した記述が自己変容想起の内容と一致するものであるかの「内容一致」、②計画が目標として述べられるのではなく、行動に移すことができるレベルで記述できているかの「行動レベル」、③非現実的なことが書かれていないかの「実現可能性」、④規模が大きすぎないか、あいまいな内容でないかの「明確性」の4つである。基準を表4に示す。

表4 具体性判別の基準項目と各項目で具体性なしと判断される計画の例

内容一致	定義	自己変容想起の内容と一致して記述できているか
	具体性なし例	(「すぐ飽きる」自分を変えるために) 多くのことに興味を持つ
行動レベル	定義	目標ではなく、行動できる計画が記述できているか
	具体性なし例	(内気な自分を変えるために) 照れないようにする
実現可能性	定義	時間、空間的に非現実的な計画が記述されていないか
	具体性なし例	(外見の悪い自分を変えるために) 身長を伸ばす手術をする
明確性	定義	あいまいではなく、明確に記述できているか
	具体性なし例	(自信のない自分を変えるために) 何かひとつ努力する

心理学を専攻する大学院生4名が分類に協力し、4名それぞれが分類を行った。研究者の分類との一致率を求めたところ、70.5%であった(実験群1: 67.7%、実験群2: 71.9%、実験群3R: 73.8%、実験群3I: 70.2%)。今回の分類は、研究者を合わせた4名で判断が一致しない場合、研究者が判断したものを最終判断とした。

実験群1、実験群2は、具体性あり・なしのそれぞれ2群をさらに作成し、実験群3では、現実自己に関する計画の具体性の分類と、理想自己に関する計画の具体性の分類をそれぞれ行った。分類の結果を表5に示す。

表5 各群の具体性有無別に分類した人数と年齢の記述統計

	具体性	度数			年齢	
		全体	男性	女性	平均	SD
実験群1	あり	22	8	14	19.80	0.66
	なし	19	9	10	20.05	0.52
実験群2	あり	20	7	13	19.50	0.51
	なし	20	4	16	19.80	0.77
実験群3R	あり	9	4	5	19.44	0.53
	なし	12	6	6	19.92	0.52
実験群3I	あり	6	3	3	19.50	0.55
	なし	15	7	8	19.80	0.56

4つの実験群それぞれを計画具体性の有無で2群に分類した4×2の8群で、DIDS-Jの変化量を従属変数とする分散分析を行い、実験群3での現実自己に関する計画の分類を用いた分析の結果、コミットメントにおいて有意差が見られた($F(5, 96) = 3.63$, $MSE = 18.70$, $p = .005$, $\eta^2 = .159$)。

また、実験群3での理想自己に関する計画の分類を用いた分析の結果、同様にコミットメントにおいて有意差が見られた(コミットメント: $F(5, 96) = 3.46$, $MSE = 18.84$, $p = .006$, $\eta^2 = .153$ 、適応的探究: $F(5, 96) = 0.88$, $MSE = 17.50$, $p = .496$, $\eta^2 = .044$ 、反芻的探究: $F(5, 96) = 0.88$, $MSE = 17.50$, $p = .496$, $\eta^2 = .044$)。

(5, 96) = 1.18, $MSE=12.67$, $p = .326$, $\eta^2 = .058$ 。

多重比較の結果、どちらの分析においても、「実験群 1 具体性なし」が、「実験群 1 具体性あり」よりもコミットメント尺度得点の変化量が大きかった ($p = .019$)。

分析Ⅲ-2 計画の具体性による志向性、イメージ、計画性の効果の違い

具体性あり計画、具体性なし計画が、アイデンティティ形成、志向性、イメージ、計画性とどのような関連があるか重回帰分析を用いて検討した。結果を表 6、表 7 に示す。

表 6 実験群 1 重回帰分析結果

		非標準化 係数(B)	β	p	Bの95%信頼区間 下限 上限	
適応的探究	志向性	.17	.20	.508	-0.36	0.71
	変容後イメージ	.43	.08	.802	-3.14	4.01
	計画性	-1.53	-.42	.282	-4.43	1.37
		$R^2 = .08$.677		
具体性あり コミットメント	志向性	-.06	-.09	.764	-0.48	0.36
	変容後イメージ	.10	.03	.940	-2.72	2.92
	計画性	.93	.32	.404	-1.36	3.22
		$R^2 = .09$.652		
反芻的探究	志向性	.04	.08	.790	-0.30	0.39
	変容後イメージ	.46	.14	.683	-1.85	2.76
	計画性	-.60	-.26	.509	-2.47	1.27
		$R^2 = .03$.926		
適応的探究	志向性	.28	.34	.256	-0.22	0.78
	変容後イメージ	1.53	.33	.360	-1.92	4.97
	計画性	-.99	-.19	.561	-4.53	2.55
		$R^2 = .23$.247		
具体性なし コミットメント	志向性	.14	.15	.616	-0.45	0.73
	変容後イメージ	2.06	.40	.295	-1.99	6.11
	計画性	-1.35	-.24	.499	-5.52	2.81
		$R^2 = .14$.500		
反芻的探究	志向性	.14	.17	.553	-0.36	0.64
	変容後イメージ	.40	.09	.807	-3.04	3.85
	計画性	1.81	.35	.293	-1.73	5.35
		$R^2 = .27$.175		

実験群 1 における「具体性なし」の反芻的探究について、共線性の許容度が低く、多重共線性に問題があった。より適したモデルを探索したところ、計画性から反芻的探究への影響が有意であった ($R^2 = .24$, $F(1, 17) = 5.46$, $p = .032$, $\beta = .49$)。

表7 実験群 3I 重回帰分析結果

		非標準化 係数(B)	β	p	Bの95%信頼区間	
					下限	上限
適応的探究	志向性	-.74	-1.05	.309	-3.09	1.61
	変容後イメージ	1.21	.38	.655	-8.82	11.23
	計画性	2.78	.41	.575	-15.23	20.77
				$R^2 = .54$.598	
具体性あり コミットメント	志向性	-.59	-1.03	.365	-2.80	1.61
	変容後イメージ	1.56	.59	.551	-7.84	10.94
	計画性	2.70	.48	.563	-14.16	19.56
				$R^2 = .41$.734	
反芻的探究	志向性	.41	1.02	.060	-0.04	0.86
	変容後イメージ	-2.61	-1.43	.028	-4.53	-0.69
	計画性	-1.37	-.35	.230	-4.83	2.08
				$R^2 = .95$.076	
適応的探究	志向性	.11	.24	.523	-0.26	0.48
	変容後イメージ	.07	.03	.934	-1.65	1.78
	計画性	-.40	-.20	.553	-1.86	1.05
				$R^2 = .06$.875	
具体性なし コミットメント	志向性	.16	.22	.556	-0.43	0.42
	変容後イメージ	-.56	-.16	.662	-3.29	1.66
	計画性	-.54	-.17	.618	-2.86	1.96
				$R^2 = .06$.883	
反芻的探究	志向性	.10	.13	.728	-0.49	0.68
	変容後イメージ	-.10	-.03	.936	-2.83	2.62
	計画性	-.94	-.30	.392	-3.25	1.38
				$R^2 = .07$.828	

理想自己変容想起の計画に具体性がある群では、反芻的探究が有意傾向であり($p = .076$)、変容後のイメージが反芻的探究へ負の影響を与えていた($\beta = -1.43, p = .02$)。しかし、共線性の許容度が 0.43 と低かったためモデルを修正すると、独立変数はイメージのみとなった ($R^2 = .54, F(1,4) = 4.67, p = .097$)。また、同様に多重共線性の問題から β の絶対値が 1 を超えてしまった適応的探究とコミットメントについても、一部の変数を削除し、より適したモデルを作成した。結果を表 8 に示す。

表8 実験群 3I 重回帰分析結果

		非標準化 係数(B)	β	p	Bの95%信頼区間	
					下限	上限
適応的探究	志向性	-.53	-.75	.193	-1.53	0.48
	計画性	1.60	.23	.638	-8.12	11.30
				$R^2 = .48$.372	
具体性あり コミットメント	志向性	-.32	-.56	.375	-1.31	0.66
	計画性	1.18	.21	.721	-8.38	10.74
				$R^2 = .27$.630	
反芻的探究	変容後イメージ	-1.34	-.73	.097	-3.07	0.38
				$R^2 = .54$.097	

考察

変容の志向性、イメージ、計画性の効果

本研究では、「こんな自分に変わりたい」という理想自己に変わるための計画があるほど、不適応的な探究が行われる可能性を示唆した。自己を形成していくプロセスと理想自己の関連について、水間(2004)は、自己を形成していく中で志向されるモデルは、単なる憧れや夢だけではなく、現実の自分との連続性を保つようなものである必要があると述べている。理想自己変容のみを想起した群では、現実自己を想起しなかったため、現実の自分と連続性を持たない理想を想起した可能性がある。そのような現実自己に沿わない理想自己へ変わるための計画を持つことは、コミットメントへ寄与せず、むしろ反芻的に自己を探究することにつながるのかもしれない。

また、現実自己変容を伴って理想自己変容を想起する群において、現実の自分を変えるための計画をもつこと、理想の自分になった姿をイメージすることがコミットメントを促進することが示唆された。反対に、現実の「変えたい自分」への変容を志向することが、コミットメントへの負の影響を与えることが示唆された。さらに、分析の Step2 での増分は有意ではなく、Step3 での増分が有意であったことから、現実自己変容のための計画をし、理想自己へのイメージを持つことがアイデンティティ形成促進のために必要なプロセスであることが示された。

計画の具体性とアイデンティティ形成

現実自己を変えるための計画について、はっきりとした具体性がある計画を記述した群よりも、具体性のない計画を記述した群の方が、コミットメントの変化量が大きく、具体的にでない計画の方が、アイデンティティ形成を促進すると考えられた。「現実のこんな自分を変えたい」という現実自己の変容想起は、現在の自己のネガティブな部分に焦点を当てる作業である。特に、計画を立てるという作業は、自分の否定的な部分に注目し、どのように自分の認められない部分を変えていくかを考える作業であると言える。ネガティブな部分に注目し、細かく計画を立てることは、アイデンティティ形成の観点から注意が必要であることが考えられた。この結果は、今までの「どの程度計画があるか」を尋ねる方法だけでは、知り得なかった結果である。実際に計画を記述させて検討することの重要性が示されたと考える。

本研究の意義と心理臨床への示唆

現実自己変容の計画がアイデンティティ形成を促進し、反対に、理想自己の変容のみ計画した場合は、反芻的な探究が促進されるという結果が得られた。これは、理想自己変容想起のみの群を用いたことで知り得た結果であり、理想自己をイメージしながら、現実自己への計画をするという一連の変容想起がアイデンティティ形成を促進することを発見できた点に本研究の意義があると考えられる。

加えて本研究では、自己変容に対して実際に計画を立てる作業を、実験的操作として取

り入れた。これまでの研究では、「計画がある」という状態がアイデンティティ形成を促進すると考えられてきたが、「現実の自分を変えるための」計画が具体的でない場合には、「はっきりと計画がある」と答えると、反芻的探究が高まることが考えられ、現実自己変容に注目し、具体的な計画を考えさせ、記述させることは、アイデンティティ形成に対して負の影響を持つことが考えられた。計画をどの程度持っているかについて尋ねるだけではなく、実際に記述することで「計画」がアイデンティティ形成へ与える効果の違いを知ることができた点にも本研究の意義があり、実際に計画を記述させて検討することの重要性が示されたと考える。今後さらに、計画させる際の操作的方法について細かく設定し、アイデンティティ形成と自己変容計画の関係について調査していく意義があるだろう。

本研究の結果から、臨床現場への応用として「今の自分を変えたい」、「もっと違う生き方をしたい」、といった人々に対する介入方法が考えられる。「今の自分を変えたい」という自己変容の志向が高い場合、「どんな自分なら今よりいいと思えるか」という理想の姿をイメージしながら、その理想に近づくために自分が今、無理なく傾倒できることを考えることで、自分に対する「一貫性の感覚」、「意味、価値の感覚」に肯定的にこたえ、より安定感を持つことができるようになると考えられる。臨床現場では、アイデンティティ形成の過程で、自分自身を否定的に見つめ、変容の細かな部分に執着しないよう、セラピストがサポートすることが望ましいと考えられる。

今後の課題

本研究で残された主な課題は、アイデンティティ形成の効果が短期的なものである点である。2回目のアイデンティティ形成の得点は、time2で自己変容想起させた質問紙に付属した質問項目で算出している。そのため、この研究からは、自己変容を想起した直後のアイデンティティ形成の影響を知ることしかできない。アイデンティティを動的に捉え、プロセスを把握するためのアイデンティティ形成であるため、今後はアイデンティティ形成が時間を経てどのように変化するかという縦断的な研究を行っていくことで、新たな自己変容想起とアイデンティティ形成の関係を知ることができると考えられる。

引用文献

- 千島雄太 (2014). 大学生における自己変容に対する志向性の諸側面—人格発達、心理的適応との関連に着目して 青年心理学研究, 25, 85-103.
- 千島雄太 (2016). 自己変容の想起がアイデンティティ形成に及ぼす影響 教育心理学研究, 64, 352-363
- Dunkel, C. S., & Anthis, K. S. (2001). The role of possible selves in identity formation: A short-term longitudinal study. *Journal of Adolescence*, 24, 765-776.
- Erikson, E. H. (1994). Identity and the life cycle. International Universities Press. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵(訳) (2002). アイデンティティとライフサイクル

誠信書房)

- Kroger, J., & Green, K. E. (1996). Events associated with identity status change. *Journal of Adolescence, 19*, 477-490.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality, 42*, 58-82.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist, 41*, 954-969.
- 水間玲子 (2004). 理想自己への志向性の構造について 心理学研究, *75*, 16-23.
- 中間玲子・杉村和美・畑野 快・溝上慎一・都筑 学 (2015). 多次元アイデンティティ発達尺度(DIDS-J)によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み 心理学研究, *85*, 549-559.
- 山田剛史 (2004). 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究, *12*, 59-72.